徳川家光

制作者
1-D
峯田 紗衣

生まれながらの将軍

徳川家光は、一六〇四年生まれ。二代将軍「徳川秀忠」の次男として、江戸城・西の丸で誕生しました。

徳川家光の幼名は「竹千代」です。生まれてすぐに両親ではなく、乳母「福」によって育てられていた。

そんな中、一六〇六年、徳川秀忠は3男「徳川忠長」を授かります。徳川家光と違って、徳川忠長は母・江によって育てられることに。

一方、徳川家光は両親からの愛情を感じることがなく両親と距離を取るようになりました。

この時代は、「長幼の序」が大切にされており、長男が家を継ぐのが当たり前。しかし徳川秀忠には「結城秀康」という兄がおり、その結城秀康を差し置いて将軍となった。たという経緯があります。家臣達もそのことは知っていたので徳川忠長が次期将軍になっても不思議ではないと考えるようになった。

この雰囲気を感じとり、徳川家光の将来に不安を感じたのが、徳川家康の乳母・福です。福は伊勢神宮に行くふりをして駿府城にいる徳川家康のもとへ会いに行き、徳川家光を次期将軍にと直訴。

その結果、徳川家康は徳川秀忠や江に徳川家光が次期将軍になることを、しっかり伝え、徳川家光に対してそのように接するように話しました。

徳川秀忠は、その言葉の通り、徳川家光を次期将軍として接するようになりました。ですが、江は徳川忠長を溺愛するあまり、徳川忠長が次期将軍になっても良いと思い続けていたのです。

そうして一六二三年、徳川家光は父・徳川秀忠にしたがって上洛し、征夷大将軍の辞令を受け、三代将軍に就任しました。

徳川家光の生涯について

1604	徳川秀忠の次男として誕生。「竹千代」と名付けられる。
1606	世継ぎ問題が発生。
しかし、	次期将軍に定められる。
1620	竹千代から徳川家光に改める。
1623	第三代将軍になる。
1632	父の徳川秀忠が死去。幕府の体制を強化する。
1635	参勤交代を義務化。
1637	「島原の乱」が起きる。
1641	鎖国体制を完成。
1642	「田畑永代売買禁止令」を発する。
1651	江戸城にて死去。

キリスト教の禁止と鎖国政策

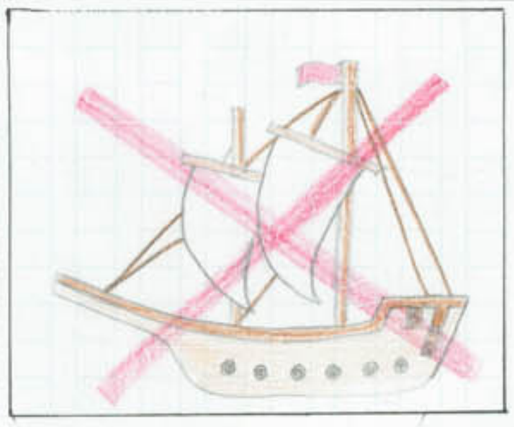
対外的な政策として、徳川家光は鎖国の強化とキリスト教の歴史を行いました。

当時、スペインやポルトガルは世界各地に植民地を持ち、さらに領土を広げる野心を持っていたため、貿易を足掛かりとして日本が植民地化されるのを危惧したのです。

また、キリスト教は、「神の前で人はみな平等」という考えがあるため、主従関係を基盤とした身分的階層を認める幕府の封建制度とは相容れませんでした。

徳川幕府初代将軍の徳川家康は、当初貿易のためにキリスト教を禁止しませんでしたが、オランダ「キリスト教を布教しなくとも貿易は可能」としたことから、キリスト教に寛容である必要がなくなったのです。そして2代将軍の徳川秀忠はキリスト教禁止政策を完了。

徳川家光は鎖国政策を取ることでこれを強化し長崎の出島以外での貿易を禁止します。貿易相手国はオランダ、明（みん）朝鮮に限定すると共に、日本人の海外渡航も禁止しました。



参勤交代

全国250以上ある大名家が二年ごとに江戸に参覲し、一年経ったら、自分の領地へ引き上がるまで行き来しなければならず、江戸を離れる場合でも正室と世継ぎは江戸に常住しなければならなかった。

参覲交代は、こうした政治的統制の面だけでなく、江戸と国元の定期的な交流により文化・経済の交流にも大きな役割を果たした。

この制度の目的は過大な費用負担により諸大名の財政を弱体化させることで勢力を削ぎ謀反などを抑える効果、あるいは大名の後継ぎが制度上全員が江戸育ちとなることから精神的に領地と結びつきにくくする効果があったとも言われるが、これらは結果論でしかなく、当初幕府にそういった意図はなかったという説が現在では有力である。

参勤交代の目的

編集後期

徳川家光について知らなかったことも知ることができた。

この歴史の出来事が変わると他にどのようなことが起きるのか、今の日本はどのようになっていたのか。などを考えたりできる機会にもなった。

他の歴史人物について調べてみたくなりました。